

要旨

¶ テーマ

日常生活の質を向上させるための”人に寄り添うAI”を作りたい

¶ 背景

第三次AIブームと呼ばれる昨今、AIに関する新聞記事が刷られない日は1日たりともない。実態はともかく、あたかも人手不足解消の有効手段として、AIやRPAの導入・活用に大きな期待が寄せられている。

しかし、人の役割に取って代わる働きを担う存在の登場が、本当に人にとって有用なものなのか、我々は疑問を感じた。2045年に訪れるとされているシンギュラリティの後、仮に人のはず役割のすべてに代わって働くAIが現れたとすると、その後の人の生活に何が残るのであろうか。そこには、役割を奪われてしまった人の生活が待っているのではないだろうか。我々が未来に期待するのはより良い生活であり、目的や生きがいを失ってしまった生活ではないはずである。人の生活の質を向上させるものこそが、今後AIに求められるものではないだろうか。

人を主体として人に寄り添うAIを作り、人の生活の質を向上させることが可能かを研究したい。

¶ 仮説

次に上げる3つの指標により、AIが人に寄り添うことによって生活の質向上が可能であるのではないかという仮説を立てた。

イ) <アイデアに寄り添う>

AIが普段の思考回路からは導き出されることのない選択肢を提案。

ロ) <判断に寄り添う>

場面毎に多岐にわたる選択肢が存在するが、その中から生活の質向上に繋がる可能性の高いものをAIが推測して選別。

ハ) <時間に寄り添う>

人と常に一緒に行動することにより、AIが常に身近に存在して行動をサポートする。

¶ 研究方法

AIを作り、実証検証を行い、考察、改修案の検討及び改修を繰り返した。

- 日常生活に密接に関わるSNSをデータの収集元とする
 - “Twitter”からデータを取得し、文章から感情を分析する。
- モデル構築段階ではより簡単に実装が出来るプラットフォームを選択する
 - ノンコーディングベースを選択。名称：“Neural Network Console”
- モデル構築は実証を伴った精度に裏付けされたものとする
 - 精度評価は、机上評価に加えて実証検証により人への働きかけ・人の気持ち

要旨

の変化を調査

¶ 検証

イ) アイデアに寄り添っているかどうか

→ 人が通常行わない判断をするなど潜在的な可能性を引き出すことができているか

ロ) 判断に寄り添っているかどうか

→ 人にとって生活の質向上に繋がる選択肢の提示ができているか

ハ) 時間に寄り添っているかどうか

→ 人にとって常に身近なところでAIが稼働していると感じるか

以上に加え、利用する人の感覚として、人に寄り添い生活の質の向上を果たしているかを検証する。

¶ 結果・考察

学習モデルの精度を向上させた結果、回答の精度は向上したが突拍子もない回答をする頻度が低くなり、面白みが減ったと感じる人もいた。また、より寄り添った提案を行うには、更に多くの情報が必要であることが分かった。

¶ 結論

本研究において、作成したAIで人の生活の質を向上させることは、限定的だが可能であることが分かった。

生活の質というものは個人の感じ方によるものが大きい。しかし非日常の中から自分の気分や好みに合った行動をいつでも提案してくれるという点で、作成したAIで人の生活の質が向上していると考えることができた。

この研究を継続し、AIがより細かな感情の把握(入力)とより正確な選択肢(出力)を提示することで、人とAIが寄り添える関係性を構築できるものとする。

文章内の記載の会社名および製品名は、各社の登録商標または各社に帰属する標章もしくは商号です。

“Twitter”はTwitter, Inc. またはその関連会社の登録商標です。

“Neural Network Console”はソニーの商標または登録商標です。